

# 鎮北台



万里の長城は偏関郊外の老牛湾で黄河を渡った。オルドス沙漠の夷界に侵入したのだ。石ころだらけのゴビが陝西と寧夏の省境で南に深く食い込み、農耕を不可能にしている。ここには、古来、遊牧騎馬民族が跋扈した。

これからオルドスの東辺に沿って鎮北台のある榆林まで、一足先に渡河した長城を追いかける。この長城に行く旅のなかでも、いちばん過酷な行程になるだろう。

中国の道路でもっともよく整備されているのは高等級公路だ。都市間をむすぶ高速道路などがそれにあたる。その次は国道で、以下、省道、県道、郷道となる。快適に走れるのは省道までで、県道以下は悪路が多い。これから目指す榆林までは省道と県道、郷道が混在するので、でこぼこ道や砂ぼこりに悩まされるにちがいない。

偏関を朝早くに出発したバスは客を拾いながら黄河沿いを南行する。大河の向こうには絶壁の黄土層とオルドスの砂漠が展開する。激しく揺れるバスは3時間ほどで省境の街、保徳に到着した。まだ山西省である。ここで大橋



▲路上の楽しみ  
北大街の鼓楼周辺では、老人たちが三々五々集まりゆったりと将棋やトランプなどを楽しんでいる。子供の姿が見えるのは街の治安が良い証拠だ。

◀万沸楼（南大街）  
中欧折衷の造作から、清代以降に建てられたものと思われる。榆林では唯一欧米の宗教色が感じられる建築物だ。現在の榆林に外国人は少なく、滞在中に一人も出会うことはなかったが、外国語学院には日本人留学生が少数在籍しているらしい。



を渡り、西隣りの陝西省に入る。長い橋には欄干もなく、越境する人たちが三輪車や徒歩で対岸の街、府谷をめざす。橋の下には黄河の濁流がある。大橋を歩いて渡りきると、すぐに榆林行きのバスがきた。神木で小休止し、榆林に着いたのは黄昏のころだった。連日の強行軍で体調は甚だ悪く、すぐに安宿をみつめて体力を養う。

翌朝、榆林の街が予想外に大きく、現代的であることに驚く。城壁の内側にある旧市街のメインストリートはきれいに整備され、デパートやファストフード店などが並んでいる。城壁の外はオフィスビルやホテルなど真新しい建物のにぎわいが郊外にむかって延び、経済発展が内陸の奥深くまで浸透していることを知る。

鎮北台は車で20分ほどの距離だ。街の喧騒がとぎれた農村地帯に4層構造の城楼が忽然と出現する。基底部の一辺がおよそ80メートル、最高層が30メートルの台形を成し、2階の南面する門額に「向明」の2文字が大きく刻されている。ここは明の万歴35（1607）年、オルドスから進入をくわだてた騎馬民族の韃靼軍を食い止めるために建立された。万里の長城に

点在する城楼の中で最大規模を誇る。鎮北とは北方異民族を鎮めることであり、向明とは「ここより大明国」の意味であろう。4階から四周をながめると、東西にのたうつ長城を鎮北台が堅牢に繋いでいるのがわかる。西には草原と樹林の間を縫うように榆溪河が流れ、その向うにオルドス砂漠を遠望できる。明の時代、鎮北台は西安府を防御する辺境の要塞だったのだ。

張家口以西の長城は土長城であることが多い。ここも同じで、駱駝の背のように風化したその姿は、ただの土手と見まちがえてしまいそうである。

旧市街にもどって、南北にのびる大街をゆっくり歩く。万沸楼、新明楼、鐘楼、凱歌楼、鼓楼などの古建築が美しい。路傍では老人たちが車座になつて中国将棋をさしている。小ぎれいな食堂に入って一、二品の地元料理を注文した。卓上には、唐辛子、ラー油、胡椒など香辛料の小壺が並んでいる。お気に入りの老陳酢（山西黒酢）が見当たらない。ここが黒酢文化のない陝西省であることに気づかされる。

中村達雄（なかもら・たつお）◆ラジオオベキーン、オンラインバス、博報堂などに勤務し、中国に16年間駐在する。現在 明治大学非常勤講師